

由比正雪 浜松柿沢室峰 井伊大老 横須賀石井桑水 茨木 高槻植村真水 安宅の関 京都梅原旭瀧 岡山重忠 同平井春嶺 衣川 1 東京若宮旭登 戦艦大和 横濱中谷裏水 安達ケ原 1 東京鈴木流泉 光秀 同望月啞江 山科の別れ 1 静岡小川野水 小督 同岡尾 鶴城 鉢の木 1 東京輕部岳瑞 同下 1 会主 赤川流鶴翁 以上で琵琶演奏終了、琵琶部長 市川鶴峰氏閉会を宣して本日の行程を全部終り記念撮影に続いて祝卓に着き一同乾盃、日 出度解散した。

錦心流琵琶秋季演奏大会

十一月四日(日)昼零時半大阪東区上町府立婦人会館、主催一水会大阪支部、後援神戸、京都両支部。金剛石 1 会員 松の廊下 1 岡本 川中島 1 田実 1 巖流島 1 関川 1 白虎隊 1 増田 剛水 1 本能寺 1 中野岑水 1 恩誓の彼方へ 1 住田 絃水 1 井伊大老 1 中山娘水 1 城山 1 金寄靖水 1 西郷隆盛 1 稲葉卓水 1 雪晴れ 1 養花駿水 1 掛合敦盛 1 杭東詠水 1 中野淀水 1 鉢の木 1 小西南水 1 湖水乗切 1 尾山好水 1 日蓮上人 佐渡赦免 1 木村蓮水 1 山科の別れ 1 中山鳳水 1 (以下来賓) 菊水の旗 1 神戸村上湧水 1 本能寺 1 京都馬場鴨水 1 石重丸 1 東京宮原璋水 1 父・乃木將軍 1 会主小川吟水。

洲楓会琵琶演奏会

十一月七日(木)夕五時東京日本橋第一証券ホ 1 1ル、主催洲楓会本部(会長大館美江子女史。後援洲楓会後援会。友千鳥 1 宮下 1 石重丸 1 遠藤。絃洲鳳 1 湯陽江 1 加藤洲晃 1 紅葉狩 1 真泉洲住 1 伊豆の御難 1 中村洲心 1 舟弁慶 1 荒川洲博 1 絃洲帆 1 西郷隆盛 1 川本玉水 1 雪晴れ 1 松崎洲陵 1 吉野落 1 平井洲誠 1 吹雪の敵 1 前田洲月 1 (以下来賓) 伊達政宗 1 水藤

錦心祭全国大会琵琶大演奏会

十一月十日(日)朝十時東京銀座ガスホール、主催一水会本部。恒例の主記が中秋の好季に開催され本部座間桜水、松岡遊水、宮原璋水三氏の「徳ぶ錦心」を序奏に松田静水名譽會長の「薄陽江」、谷暉水名譽顧問の「霧の川中島」を始め全国三十七支部から参加の新進、古豪の熱演が続き盛況裡に本年度の一大行事を終った。尚翌十一日は総会、懇親会が開かれた。

京都琵琶協会十一月例会

十一月十一日(日)昼一時、本部平井会長宅。(次号詳報)

筑前琵琶演奏会

十一月十八日(日)十一時福岡市大博多ビル十二階ホール、主催筑前琵琶保存会(会長嶺旭蝶女史、創立十五周年記念演奏会)(次号詳報)

ラヂオで琵琶放送

十月十四日(日)夕六時十五分NHK第一ラヂオ。川中島(テープ録音) 1 故榎本芝水氏。

予告

○ 日本琵琶柔協関西支部の一泊懇親旅行会 十二月二・三両日(日)月、伊勢・志摩・鳥羽方面。
○ 各流派琵琶演奏大会 十二月七日(日)正午 東京日本橋第一証券ホール、主催日本琵琶

楽協会。
○ 義士祭演奏会 十二月十四日(日)昼一時大 阪義士寺(吉詳寺) 大阪琵琶同好会協賛。
○ 京都琵琶協会十二月例会 十二月九日 (日)昼一時本部平井会長宅、夕刻から忘年会。

きごとあ

昭和五十四年いよいよ本月一 ばいで終りを告げる、時間の経過の 早いのに今更ながら驚く想えば昭 和二十九年に本紙第一号を出してか ら夢のように二十五年が過ぎた。機関紙の編 集発行といふことに専門的知識も経験もない 筆者が、兎も角も今日までこれを続けること が出来たのは偏に読者諸賢の御垂教御鞭撻 によるもので誠に有難く感謝の気持ちで隠す ことが出来ない。編集者としてこれでも精 魂の限りを尽くして毎月号に努力を傾けてい るつもりであるが、読んで下さる皆様にして みれば御不満の点多々あるのではあるまい かと懸念している。お気付きの点があれば御 腹藏なく御指摘御教示下さって「京絃」が我々 琵琶愛好者にとって、より良い機関紙とな り、引いては琵琶演奏発展のための一端を担う 機関紙となるよう御力添えを頂きたく切にお 願ひ申し上げる。ではどうぞ充分御自愛の上 よりお年をお迎え下さい。

昭和五十四年十二月一日発行(非売品) 編集者 植村 寛 社水 発行所 高槻市津之江北町一ノ二番 電話〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶 機関紙

京 絃

第三〇六号 京 絃 社

琵琶 (一四)

地神琵琶の成り立ち(下)

村山道宣

(前承)ところで、話は半分横道にそれて しまったが、先程述べた琵琶の話に再び戻ること にしよう。その琵琶の古ぼけた様は、数 百年の歳月の経過を想わせるのに充分なもの であつた。そしてその琵琶には明らかに六個 の柱が付いていたのである。私は北九州や宮 崎県延岡地方など各地で見てきた六柱のうぐ すが琵琶のことを想ひ出して来た。

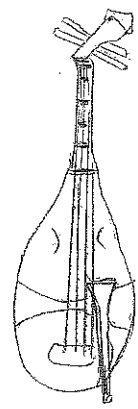
は本来五柱である平家琵琶を六柱にして用い たのである。即ち形態は平家琵琶のものを取 り入れながらも、音律は従来のもので用いた のであろう。 六柱の琵琶の音楽的基盤は、既に相当根強 いものだったに違いないのである。 また十六世紀末、島津家の要職にあり、当 時の風流人でもあつた上井寛兼の日記には、 所々に平家琵琶を聴いたという記事が出てく る。その当時、既に薩摩の武士達にとって平 家琵琶は親しいものだったのである。

楽琵琶に良く似た川崎さんの寺の琵琶を含 め、九州各地に見られる六柱の古い琵琶の存 在は、また、三徳院で見た地神琵琶や貴人像 の持つ平家琵琶は、一体どのようなことを物 語っているのだろうか。中世以前、恐らく 九州の盲僧達は北も南も区別なく六柱の琵琶 を使用していたと思われる。その後、戦国時 代のある時機に薩摩の盲僧達は島津氏の肝入 りもあり、平家琵琶を彼等の法流のシンボル として取り入れたのであろう。しかし、彼等

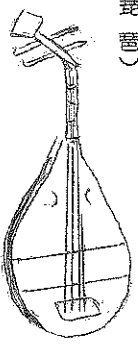
な私は一遍聖絵の中で六柱の楽琵琶型の 琵琶を背負っている琵琶法師を見たことがあ る。それは相模の国、片瀬ヶ浜の踊り念仏の 絵に見られるものであるが、このことは六柱 の琵琶が鎌倉時代末期、既にかなりの拡がり を持っていたことを示すものであると思われ る。川崎さんの寺にある六柱の琵琶は、も しかしたらこの一遍聖絵の中に出て来る琵琶 と同種のものかも知れない。

次号から現在の薩摩琵琶、筑前琵琶の稿に移る。

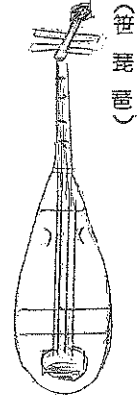
(うぐいす琵琶)



(楽琵琶)

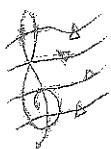


(世琵琶)



五絃閑話 (三)

水藤 五郎



(前承) これ等の全てが舞踊、演劇、文楽人形と結びついていることによつて、表現力をカバーしているからであらうと解することが出来る。過去に於いては、百%理解することが出来た内容が、今日では半減はしているが、舞や、人形、芝居との共演によつてその弱点を補なっているのである。

これに反して、琵琶はそれのみが表現の全てであつて、独自の強い芸能である。これは琵琶の強みであると同時に弱点でもある。三味線愛好者は、同時に舞踊や人形、芝居愛好者である。舞も好きだし三味線も好きなのである。見て聞いて楽しむのである。又、踊つて聞いて楽しむ多くの人がいるのである。しかしながら琵琶はそのものだけの楽しみである。合奏したり、他の芸能との共演と云う楽しみは少ない。一人で演奏する楽しみはあるのであるが、これは琵琶に限つたことではないし、琵琶人がことさらそれに秀れているとも思えない。むしろ、この他芸との共演合奏の楽しみ等を増やすべく考える必要がある。今日の琵琶がつまらない原因を、全て詞章

と題材の古さと決めることは出来ない。むしろ、音楽表現の拙さ、舞台効果の低さ等の芸能水準の低さを原因と考えることが出来る場合も多々あるのである。琵琶をマスコミに乗せた武満徹氏はある対談で、「琵琶はあまりにも音楽的に完成されすぎてしまつていて、私は好きではあるけれども、やはり近い間に減びるものでしょう」と云っているのを読んだことがある。この近い時とは何年先なのか予想することは難かしいのであるが、全く根拠のないことではないし、又、恐ろしいことでもある。

作曲家武満氏の云う様に、琵琶はあまりにも自分を尊ぶあまり、孤立した芸能になつてしまつてゐる。他の芸より高い位置にあるならばよいのであるが、若し、とり残された意味での独自、孤立であるならば憂慮すべき問題であつて、積極的に他芸との協調を図る必要がある。

勿論、現在の琵琶界にとつてこれが全てとは思えないが、やはり邦楽の仲間入りをするのが大切であらう。それによつて、琵琶に於ける説得力の弱さをカバーすることである。「崩れ」は琵琶ならではの表現法であつて、合戦の場面を表わすのに適している演奏であるが、これ以外は極めて歌詞を活かす表現に不向きなものが多い。「虫の音いと哀れなり」と歌つて、ポカーンと一の絃を叩いているのがある。これなど全く理解出来ない表現であらう。

泰平に酔う元禄時代

赤穂浪士の義挙

辻 旭城



織田、豊臣時代に於ける争いに明け暮れた戦国期も終止符をうち、関ヶ原の合戦で豊臣を破つた徳川家康は、慶長八年(一六〇三)江戸に幕府を開いてから、百余年が過ぎた。

五代將軍綱吉は、三代將軍家光の第四子で、母はお玉といつた。お玉は京都堀川の小さな八百屋の娘で、父の病死後、母は摂家待本庄常正の後妻となり、お玉はこの家で成長した。一方、公家の参議という栄職の六條有純の娘で、お万という美貌の女がいた。お万は仏道にこがれて都を離れ、伊勢の山田に来て皇大神宮と関係の深い尼寺、慶光院の住持となつた。そして、寛永六年の春、お万が住持継目のお礼言上のため江戸幕府を訪れたとき、計らずもその美貌が將軍家光の目にたまたつて、そのまま御殿に留めおかれ、やがて還俗して家光の側室となつた。

お万の方には子が出来なかつたが、お玉は正保三年正月綱吉を生んだ。綱吉は長ずるに及び右馬頭に任官して、二十五万石の上州館林城主となつたが、江戸神田に屋敷を構えて館林には殆ど行かずここで暮らしてゐた。

綱吉の正室は関白鷹司家の姫であつたが、男児が生まれても生まれても早死したので、僧隆光の進言により生類憐れみの令を出して、捨て犬などを狩り集め、各所に立派な小屋を造つて飼育し、犬に危害を加えた者には刑罰を科すという布令を出したため、世間では綱吉を大公方といひ悪評を買つたが、これらは総て大老柳原吉保の政策であつたともいふ。こうした中で元禄十四年(一七〇一)の春三月、江戸城松の廊下で、播州赤穂城主で勅使接待役の浅野内匠頭長矩が、暗略のもつれから指南役の高家筆頭吉良上野介義央を刃傷に及ぶといふ、空前の珍事が起こつた。三月十四日は勅使下向中最も大切な、將軍勅答といふ重い儀式が行われる日である。

これは、その儀式が始まる直前のことで、長矩は即日田村邸の庭先で切腹、浅野家は取りつぶし、赤穂の城地や江戸の藩邸など一切没収といふ、誠に苛酷な処断が行われた。一方、斬られた相手の上野介には何のおとがめもなく、幕府から医者まで差遣わされ、充分養生してこれまで通り勤めるようにとの寛大な処置がとられたのである。

殿中での出来事とはいへ喧嘩である以上、この片手落ちな処分は東照大権現家康以来の喧嘩両成敗という武家の法度にもどるもので、前代未聞といふべき裁決であつた。それから一年九ヶ月後の元禄十五年極月十四日の夜、大石内蔵助以下四十七人の忠義の旧臣が、江戸本所松阪町の吉良の屋敷に討入

ることになる。

今宵の討入りを前にして、折りから降りしける雪の中を、内蔵助は紋服姿に威儀を正し、足軽寺坂吉右衛門を供につれて、赤坂南部坂の浅野家下屋敷を訪れた。

主人長矩切腹の報を聞いた夫人阿久里は、髪を下ろして瑤泉院と号し、日夜主人の菩提を弔つて、大石らの家臣が一日も早く、怨敵吉良上野介を討ち果たして呉れるよう希つてゐる処へ、最後の暇乞いにやつて来た大石は、腰元の中に一人の不審な女が居るのに気付いたので、討入りのことを秘して辞去したが、それとも知らぬ瑤泉院は、無念の涙を呑んで席を立ててしまつた。内蔵助は戸田の局に、後刻瑤泉院に手渡ししてくれるよう頼んで、紫の風呂敷に包んだ一巻の巻き物を置いて、心で泣きながら暇を告げた。

その夜も更けて、仏間でかすかな物音がするの戸田の局が行つてみると、新参の腰元が、昼間大石から預つた風呂敷包みを盗もうとしてゐるので、捕えて糾問すると、内蔵助が見破つてゐた通り、彼女は吉良のスパイであつた。

戸田の局はこの風呂敷包の巻物を直ぐに瑤泉院に手渡ししたが、開いてみてびびり仰天、これこそ四十七士の連判状であつたので、二人は大石の苦衷を察して泣きくづれた。ところへ、吉右衛門が、今晚本懐成就して上野介の首級を泉岳寺の亡君の墓前にお供えいたしました、との知らせを持つてきた。

我が道を行く

六十五年 (七〇)

西郷 天風



「九江」の宿舎は野戦病院と共に、蔣介石軍の遺物らしく割合整つており、毎日清水を運ぶ数台のトラックもこの附近から通るので、私には都合よく毎日そのトラックに便乗して盧山通いを楽しみいるうち「盧山」の少し手前の橋の上から西方遙か、芦の葉の繁る中に見る瓦屋根に心引かれつゝあつたが、いよいよ「九江」を去るに及んで、その家の探索をおもひ立つた。

その由緒ありげな家は、盧山の北麓を流れる川の右岸で、丈なす芦の繁茂するに任せ、民家はおろか農耕の跡さえ見られぬ荒地、その中を行くと数十分に於いて、漸やくたどりついたので八卦堂のある廟だつた。見馴れぬ御堂の内部は薄暗く、一脚の机すら見当らぬなかに、何やら文字が刻んで見える。

眼を据えてよく見れば、堂の内壁を一通廻りする帯状の中一米全面を、七字詰の漢字数十行が整然と埋めつくしてゐる。ハテこれは？と胸騒ぎを押さえながら薄暗くてハッキリ見えぬ刻字をさぐり読むうち、「薄陽江」なる文字を発見、之こそ、ま

ぎれもない白楽天作「琵琶行」の詩であり、この廟堂こそ嘗って、白楽天居住の遺跡に外ならず、この繁茂する声の葉影こそ「潯陽江」の歌詩発祥の川辺だったのである。

とは云うもののこの川が、果たして「潯陽江」なるやいなや確めたくも、この附近一帯の住民は、過日まきちらされたコレラ菌の恐ろしさに、只の一人も姿を見せず、手にある地図には川も橋もさだかでない。

しかし「廬山」の南の麓には「蕪陽湖」あり、これと对象的に、北の麓にある川は「潯陽江なり」と見ることも妥当なるを思う時、その歌詩潯陽江を最も得意とする私が、奇蹟的に引きよせられたのは、世に云う「因縁」の然らしむる所と云うべきであろうか。

兎に角、そうした感懐に耽りながら「廬山」の風光に對峙すれば、いつしか口にほとほと吐くのは、「芦と竹との生いしげる、いぶせき中に家居して、あした夕べに聞くものは高嶺のましら ぼとときす」と、潯陽江の一節であった。

かくて翌朝「九江」を後にして南京に立寄り、宣撫班や特務機関の友人達に慰問の成果を吹聴後、南京大陸新報の鈴木社長と懇談の末、次ぎは当時作戦中だった「南寧」の戦況視察旁々、慰問を兼ねた従軍を約して上海に戻ってみれば、上海では海軍側の戦勝状況放送に際しての琵琶演奏の件や、海洋少年団設立の祝賀会及び中支占領地区警備員連絡大集会等に出演の交渉が私を待ちかまえており、

俄かに多忙になった。

思えば事変勃発後既に三年の歳月は過ぎ、今や占領地域も日毎に増大して日本国土の数倍にも達し、その膨大なる区域の警備などを打合せた後、慰勞を兼ねた宴会に移れば、私は司令官や参謀長等の中に坐して、軍歌「愛國行進曲」の歌詩そのままを琵琶歌として演奏し、続いて「九連城」「旅順開城初段」の三曲を以て、占領地区最前線の防備を担う数千人の労苦をねぎらえば、全員大喝采でこの戦地色に満ちた宴会に感激の意を表していた。

この事あって以来、私の顔は中支占領地区全般に亘って有名となり、戦跡視察や軍用機便乗の折など種々好意を示され、正に戦友の親しみをしめしめ味わうことができた。

台湾でも、この年から仕事一つふえて、私一人では手不足となり友人を頼むことになったが、それは台湾製糖の都留課長の希望に依るもので、琵琶だけでは子供が可愛想ゆえ何か子供達に判る催しが欲しいと云うので、手持の小形映画パチーベイを持参すれば、子供どころか家族ぐるみの大歓迎を受け、爾後毎年之を続けることになったが、其後戦局の変化により台湾巡演はこれを限りに終ってしまったのも是非ない事であった。

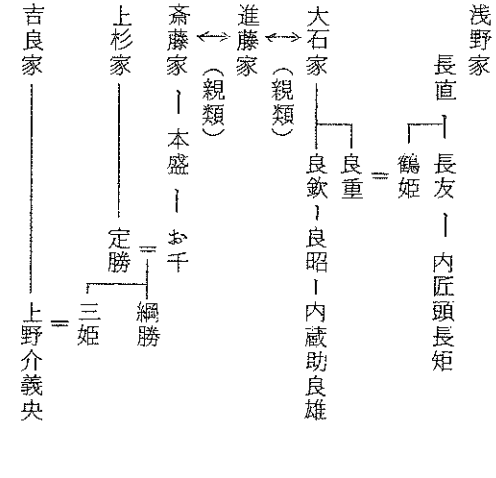


浅野と吉良は遠縁の仲

「大石家が「結び役」」

殿中刃傷事件の主人公三人、赤穂藩主浅野内匠頭長矩と、かたき役吉良上野介義央、それに義士の頭領大石内蔵助良雄はそれぞれ遠い縁戚の關係という新説が赤穂市上飯屋旧城内、大石神社から出版された「大石家外戚枝葉伝」の中で明らかにされた。

浅野、大石、吉良の結び付き



「大石家外戚枝葉伝」は、大石内蔵助の一族で義士の後援者として知られる大石無人良聡の長男、津輕藩士大石庄司良磨が元禄の事件後、五十年間に亘って調べ上げて記したとされる三冊の文書に基づいている。大石神社の話では、この文書は良聡から九代目にあたる大石良郷の夫人から昭和四十二年に寄進された史料、遺物の中に含まれていた。和紙とじの文書の巻末には「右当家外戚枝葉伝三冊は、良磨が五十年來、精力をつくし、先考及び一族古老の談話を収録、外戚の書記を粗閱す、元文三戊午の年夏、武州江戸城車亀戸の閑居において一中路一文章最も拙、子孫のほか他見を許すことなかれ」とあり、直系子孫以外、見る事の出来なかつた秘録という。

解説できないままになっていたが、これらの史料にかねてから深い関心を寄せていた義士研究家佐佐木杜太郎氏がこのほど解説に当たり、大石神社境内の国指定史跡大石邸長屋門の解体修理復元と、大石邸跡庭園修復事業を記念に出版され、新説が初公開された。

佐佐木氏によると、近衛家に古くからつかえていた齊藤家の本盛の娘お千が、上杉定勝の側室となって綱勝と三姫(とみこ)を生み、三姫は吉良上野介義央の妻。

この齊藤家と親類にあたる近衛家諸大夫の進藤家が、大石家と姻戚関係を重ねた深い親類だった。この後、大石家の良重が主君浅野長直の娘鶴姫をめぐって、その子が浅野分家を継いだ。良重は内蔵助の祖父の弟(大叔父)

で、血のつながりは無いものの浅野、大石、吉良はそれぞれ遠縁になることがわかった、という。

大石神社では引き続き、大石家のルーツ津輕・大石家までさかのぼる未公開の「大石家系図」を出版する計画にしている。

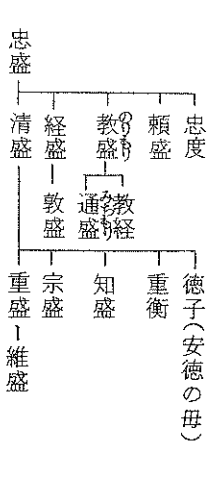
(朝日新聞から)

「平家物語の女性」

「小宰相」を聴く

「三島江の入江の葦の鶯(をしどり)も、夫婦(めをと)なるこそ定めなれ。」演奏時間約三十分。所出「平家物語」作者 早川幾水先生。

去る十月二十一日(日)京都本妙寺本堂、物故会員追悼琵琶演奏会で先生が発表演奏された。



通盛は一の谷の合戦では山手の大将だったが傷をうけ、敵にとりかこまれて戦死する。小宰相北の方は通盛の子をみごもっていたのである。

小宰相はもと西門院に仕える宮中一の美人で、十六才の春、女院にお伴して法勝寺へ花見にいっただとき、通盛が一目見て心を動かしてそれが縁で結ばれた相思相愛の仲であった。夫(をと)と吾との中の、未生の吾子をもろともに、ひとつ蓮の花の上のみちびきたまへとふし拜む。船うつ波は白妙に、蓮の花の百千(ももち)ひら、勿体なやおん来迎の微妙(みめう)の楽の聞ゆなり。あはれきのふは九重の、庭の芙蓉の花と言はれ、また通盛が妻として、むつびしかども長からで、あさき夢みし酔ひもせず、有為の奥山けふ越えて、こよひは瀬戸の内海の波の泡とぞ消えたまひける。

琵琶の妙えなる響と美しい歌詞は満堂の聴衆に深い感動を与えたことでしょう。戦いで夫を失ったある若い妻の悲しみ、彼女は生きていられないで自ら生命を断ったのである。(鴨水記)

新年特別号発行について

明年一月一日発行の本紙は例年の通り正月特別号とし紙数を増して内容豊富な記事を掲載、併せて新年交礼号として貴名を掲載させて頂きたいと存じます。

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つは京絃援助の思召しをも含めて多数御協賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添え十二月十日迄に御申込み願います。

物故会員追悼演奏会

天候に恵まれた秋晴れの十月二十一日(日)正午、京都琵琶協会・錦心流一水会京都支部・薩摩琵琶四明会共同主催の首記が京都東山仁王門前の本妙寺で開催された。先づ正午仏前に橋本一就上人の読経で物故会員達を偲びながら合掌焼香して本堂前に一同整列記念撮影を済ませ十二時半演奏開始。二十号台風一過直後のすがすがしい快晴で聴衆は見る見るうちに堂に溢れて超満員裡に左記の通り各派会員の、故人に捧げる熱演が続き予定通り五時半終演。御遺族を始め特別関係の方々を交えて出演者全員が席を連れね本日の盛會を祝して乾盃し暫し故人を追憶する談話を交わしその冥福を祈りつつ七時散会した。因みに追善物故会員は(いろは順)伊東旭山、井上栖水、伊吹正陽、原口天孫、早石天波、長谷川博章、渡辺洛水、香川錦風、田村秋峰、内田良三、栗本天芳、古谷寛水、木村維水、美登里進水、関口瀧水、杉本治作の十六氏である。なお聴客の全員に供養品が贈呈された。

(献奏者と曲目) 山田明嶺一紅葉狩一坊寺旭清一太楠公一山本嶺舟一吉野落一山岡旭清一伊豆の御難一水内煖水一白虎隊一桜井旭富一都落一伊勢谷安江一台湾入一馬場鴨水一本能寺一木下皇水一新撰組一植村實水一富樫の涙一牧南水一須磨の浦風一荒木旭媛一大徳寺一田中敏水一巖流島一島津天嶺一真木の雫一早川幾水一小宰相一梅原旭瀧一横笛一平井春嶺一寂光院。

堺百舌鳥八幡宮奉納演奏会

十月四日(木)夕五時大阪琵琶同好会協賛。応仁天皇を祭神とする同宮では毎年中秋の月見祭を行事とし当夜は快晴で数万人の参拝人で賑わった。尚朝日放送では翌五日前の实况を放映した。常陸丸一森野一吉野山懐古一安光一赤垣源蔵一古野一湖水渡一窪田一本能寺一辻旭城一菅公一島津旭都、米原旭智、石橋旭嶺、那須与市一北見旭仙一山中の月一野々村幽水一花の白虎隊一作花旭友一靖国の母一秋田楓葉一荒城の月一入江旭水一川中島一田中敏水一関ヶ原一矢野旭信一姫ゆりの塔一石橋旭嶺一堅田落一朽木旭明一吉野落一天津八千代。外に詩吟、剣扇舞、日舞など数番。

京都琵琶協会十月例会

十月七日(日)昼一時本部平井会長宅。本日は微恙や事故のため出席者少なく淋しかった。都落一桜井旭富一白虎隊一水内煖水一光秀の最期一平井春嶺一舟弁慶一田中敏水一須磨の浦風一牧南水一送別一馬場鴨水一演奏なし一梅原旭瀧、山岡旭清。夕食を共にして散会。

京都伏見稻荷大社で琵琶献奏

十月十日(木)朝十時、大阪琵琶同好会協賛。五万数千の講員を持つ同大社は全国稻荷神社の総本家、当日は秋の大祭で賑わった。花の白虎隊一矢野旭信一義家一島津、米原一井伊大老一辻旭城一曲垣平九郎一石橋旭嶺一戦艦大和一田中敏水一粟津が原一天津八千代一禅師

日本芸術琵琶普及会十月例会

十月二十一日(日)昼一時東京文京区大塚の貸席京屋にて開催。諸弾法連弾一錦幽一城山一内田隆章一茨木一山本隆水一乃木将軍一山崎錦幽一本能寺一高田栄水一忠度一坂入俊風一彰義隊一青木早水一大物の浦一若宮旭登一白虎隊一杉山旗水一吹雪の敵一日比桜媛。以上研修を終り小宴の後六時半散会。

秋季琵琶演奏会

十月二十一日(日)昼一時松山市民会館ホール、主催愛媛琵琶連盟、後援県教育委員会ほか。門琵琶合奏一浅田、白石一君が代一大木一本能寺一大西一詩吟山中の月一黒木一高源吾一森本旭彦一衣川一升沢悠鏡一若き敦盛一原田旭悠鳥一都落ち一斎藤旭苑一伽羅の兜一酒井旭調一関ヶ原一和田旭秀一堅田落一遠藤旭佳一石田三成一村上旭隆一井伊大老一西森旭生一茨木一立花宵水一加藤清正一石塚旭奏一鴨川の露一佐竹旭都一茨木一升久旭好一玉藻の前一谷口旭英一彰義隊一白石旭優一石童丸一栗田絲水一羽衣一白石芦泉、浅田芦水尺八、バレエ入。

第二十二回琵琶演奏大会

十月二十一日(日)昼一時横須賀市田浦公民館、共催横須賀琵琶連盟。市教育委員会、市文化協会、後援錦心流神奈川県連。市文化祭

筑前琵琶協会全国大会

十月二十七日、八両日(日)朝十時鹿児島市中中央公民館、主催日本旭会、司会鹿児島旭会。七十年の歴史を持つ筑前琵琶協会の第四十九回全国大会は本年は日本列島の南端、噴火の桜島で名高い鹿児島市に於て開催され第一日四十六曲、第二日四十五曲、合計九十一曲が独奏、合奏、琵琶舞踊、茶道松風の曲、華道花の恵みや新琵琶楽等の豪華版で全国各地旭会の新人古豪らによって、両日とも午後九時まで披露されて盛況を呈し聴衆を喜ばせた。尚両日とも先着二百人の聴客に記念品が贈呈された。翌二十九日は市内の林田ホテルに於て総会に続き懇親会が開かれて遠隔の絃友相互間の旧交をあたためた。

鉦水会第十九回演奏大会

十月二十八日(日)朝十時半逗子市立図書館ホール、市文化祭参加、主管鉦水会、主催市教育委員会、市文化協会、後援一水会本部ほか。

参加。金剛石一会員一同一嘘小野訓導一柴田叙水一父帰る一太坪碧水一月に徳ふ一今井旭柳一羅生門一末吉希水一短歌若山牧水一柴田風一羅生門一齊藤旭邑一新撰組一小関香水一太楠公一若林旭洋一坂本竜馬一森捧水一高源吾一吉島旭紅一舟弁慶一鈴木江水一寄慰堂祭一小保内寅水一淀君一石井桑水一サハリン悲曲最涯の梅枝一土橋虎水一川中島一齊藤殊水一元寇一伊集院牙城一城山一山田幻水一(以下来賓)横笛一横浜塚本神水一井伊大老一小田原石川雄水一八甲田一横浜采崎統水一小栗栖一藤沢榎本山水一西郷隆盛一逗子平野鉦水一勳進帳一平塚梅沢同水一扇の的一船橋木原綾子一戦艦大和一水会本部中谷襄水一本能寺一岡山口速水。

阿部秋子琵琶の祭典特別公演

十月二十八日(日)昼十一時名古屋中小企業福祉会館、主催名古屋秋声会、後援阿部秋子後援会ほか。錦心流諸名士の外押田、仲川両名手の筑前琵琶を組入れたのは画期的な企画で好評を受け盛況を呈した。武蔵野一土山、近藤一蓬萊山一近藤一忠度一田畑一菅公一宮原一月下の陣一小沢一七脚一鬼頭一五条橋一山本一城山一兵頭一紅葉狩一山田秋峰一會津の権児一久保田秋鳳一八甲田山の露一長谷川秋楓一羽衣一松岡秋翠一花紅葉一兵頭、鬼頭。絃山本、長谷川、松浦一舟弁慶一京都牧頭一桶狭間一静岡武田恒水一本能寺一名古屋谷津壮水一西郷隆盛一横須賀土橋虎水一天野屋利兵衛一福井内田景水一茨木一東京谷津豊水一川中島一名古屋奥村慧水一大物の浦一東京仲川旭朋一絃旭窈一敦盛一岡宮原暉水一

赤心流琵琶大会

十一月三日文化の日(日)午前十時静岡市駿府町(城内)静岡県婦人会館(会長赤心流鶴翁氏)明治以来十一月三日は雨が降らぬことになっていて当日も抜けるような青空の秋晴れで盛会であった。赤心流では毎年春は詩吟の会、秋は主として琵琶の演奏会を開催され今回は第十二回目で、琵琶の演奏会を開催され心会歌、理事長挨拶に続いて門人吟詠五題(十九人)、昇任免状授与(初、中、奥、皆伝計十五人)、昇任優位者吟詠五、門人(教師)吟詠十一人、役員吟詠六人が終り午後から琵琶演奏。送別一山本駿堂一春の調一松本鶴翁一菅公一萩野鶴洋一月下の陣一阿井雄心一天目山一市川鶴峰(以下来賓相談役)一戻り橋一名古屋阿部秋子一本能寺一神戸田中敏水一

第十八回琵琶と詩吟詩舞の会

十月二十八日(日)正午西宮市夙川公民館松下ホール、主催西宮市、市教育委員会、主催西宮琵琶詩吟同好会(会長三浦蓮水女史)、後援一水会神戸、大阪両支部。市文化祭参加。城山の月一高原柳水一會津白虎隊一田中珠水一木宮梅水一菊水の旗一村上湧水一巴の前一生島華水、滝沢花水一和懐古一吉田秋水、川上琵琶一蓮生一吉山瞳水一戦艦大和一田村魁水、楊嶽水一琵琶舞旋君一三浦蓮水。立方二一楊貴妃一東京藤波桜華一川中島一名古屋水谷浩水一曲垣平九郎一富山田中愛水一巖流島一大阪関川昌宏、金寄靖水。絃小川吟水一盛綱先陣一會主三浦蓮水。外に三浦桜泉女史による詩舞「近江八景」を始め詩吟、詩舞二十三題で盛会であった。

大森彦七一同押田旭窈一石重丸一同前田秋声一戻り橋一會主阿部秋子。外に詩吟六題。